

今や衣食物品が余り、あふれている豊かで平和な日本、有り難いことである。

「戦なき 平和日本 半世紀

経済大国 有り難きかな」

四 今だから言える話

佐賀県 平野 三吉

常夏の太陽は容赦なく照りつける。小生は常に本部勤務だった。昭和十七（一九四二）年、潮田部隊長当番で、昭和十八年四月頃に部隊長が帰国。その後任が沖部隊長で、五月頃まで当番だったが、その後、坂本君に申し送った。その後は被服、兵器倉庫の係、ある日は衛兵勤務ある日は使役等が日課だった。少々うんざり気分である。

戦勝のニュースは北から南からとんでくる。そんな時非常呼集がかかり、身体がしびれるような言い知れぬものが全身に走った。作戦命令が出た。ようしやる

ぞ、一人前の軍人になったような気がした。

元氣いっぱい、作戦準備にかかる。米、カンパン、弾薬等々十二日分、約六〇キロを準備。勇気を出して元氣よく出発の日を待った。

いよいよ出発集合、その時、本部分隊に自転車二台が配備され、小生と酒見二等兵に渡された。

出発以来二日、三日と過ぎた。行軍は山岳あり川ありで、自転車は押して行くばかり、小生はこんなことでは身がもたない。自転車をもちあましながら行軍は続く。自転車のペダルが足にからみ、もう体力の限界とみた。道は山岳岩場、よろけるふりしてペダルを岩にぶつけた。ペダルがボロリと落ちた。シメシメとばかりに「班長殿に申し上げます。大切な自転車を壊しました。申し訳ありません」と告げた。「しかたない、乗れない自転車は捨てよう」小生は内心ほっとした。やっと身軽になった。

酒見二等兵は自転車を大切に運んだが、数日後行軍はますます厳しくなった。日はとつぷりと暮れてもまだまだ行軍はつづき、まっ暗な細道、それに山

岳である、手さぐりの進撃である。谷の下の方で「助けて、助けて」と蚊の鳴くような声がする。酒見二等兵の泣き声だ、数人で暗がり得手をつなぎ酒見をやったのこと引き上げた。自転車はそのまま置き去りになった。進撃はとめどもなく続いた。

雲にそびえる山々、山岳を夜通しで上り、また下山、小生はマラリアで発熱してしまった。夜が白々と明けるところ村落の空き家に着いた。小休止である。小生は安心したのか、寸時の間何も知らなかった。小生のホッペをパタパタたく、ほっと気がつくと原一等兵と坂本二等兵が心配そうに「イモ」が煮えたから食べて元気だせと、その味が今でも忘れられない。出発だ進撃だ、食糧がほとんどない。

それから数日後、小休止の時「イモ」をふかして食糧にして、夏用弁当箱に入れて進撃だ。ちょっと小休止の時イモを取りだして戦友と分けて食う。「おい、だれかイモ食うか」「おい、俺にくれ」とは沖部隊長の声だ。どうぞどうぞ部隊長といえども腹が減っては何とやら、とてもおいしく食べられた面影は忘れる

ことが出来ない。

今では沖部隊長、坂本君、共に天国へ行く。我ら命永らえた者は昔話に花を咲かせ、戦没者の冥福を祈ろうではありませんか。